

一片の音楽、一輪の花で拓ける道……

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団

第77回定期演奏会

2011年9月5日(月) 19:00開演

東京文化会館 大ホール
Tokyo Bunka Kaikan Large Hall



主催：東京ニューシティ管弦楽団

株式会社 HANAコーポレーション

〒105-0003 東京都港区西新橋一丁目21番8号
取締役 小茂田 勝信



Members

音楽監督・常任指揮者 内藤 彰 ※
 首席客演指揮者 曾我 大介 ※
 客演指揮者 アンドレイ・アニハーフ

コンサートマスター 鈴木 順子
 客員コンサートマスター 浜野 考史
 客員コンサートマスター 執行 恒宏 ※

●第1ヴァイオリン

○執行 恒宏 ※
 中澤 真理子 ※
 中川 さと子 ※
 小澤 郁子 ※
 山川 奈緒子 ※
 河合 晃太 ※
 寺田 久美子 ※
 大塚 杏奈 ※
 升本 理央 ※
 海保 あけみ ※
 村瀬 敬子 ※
 吉岡 篤志 ※
 福田 貴子 ※
 嶋村 由紀子 ※
 上田 博司 ※
 剣持 由紀子 ※
 中村 朱見 ※

●第2ヴァイオリン

○松村 一郎 ※
 高階 久美子 ※
 伊東 佑樹 ※
 秀川 みずえ ※
 宮本 薫 ※
 松岡 聡子 ※
 岩澤 幸子 ※
 宮本 佳代子 ※
 老田 美郁 ※
 服部 亜希子 ※
 齋田 真紀 ※
 高原 久実 ※
 荒巻 泉 ※

●ヴィオラ

○中山 良夫 ※
 久郷 寿美子 ※
 宇佐美 久恵 ※
 鈴木 友紀子 ※
 酒井 雅の ※
 三谷 陽子 ※
 寺田 久美子 ※
 島岡 万理子 ※
 沼田 由恵 ※
 三上 賢一 ※
 浅川 文 ※

●チェロ

○齋藤 章一 ※
 星野 敦 ※
 船田 裕子 ※
 豊原 さやか ※
 中林 成爾 ※
 富成 倫子 ※
 海老澤 洋三 ※
 平山 正三 ※
 若狭 直人 ※
 望月 直哉 ※

●コントラバス

○佐々木 等 ※
 青山 幸成 ※
 照井 岳也 ※
 金子 敦子 ※
 高橋 直人 ※
 松江 佐知子 ※
 小宮 正寛 ※

●フルート

○立住 若菜 ※
 谷藤 万喜子 ※
 福田 将史 ※
 井ノ上 洋 ※

●オーボエ

○徳田 振作 ※
 川城 恵 ※
 李 英珠 ※
 池田 祐子 ※

●クラリネット

○西尾 郁子 ※
 松元 香 ※
 鈴木 生子 ※

●ファゴット

○藤田 旬 ※
 神山 純 ※
 當真 令子 ※
 松里 俊明 ※

●ホルン

○猪俣 和也 ※
 松浦 光男 ※
 村上 陽一 ※
 飯島 さゆり ※
 友田 雅美 ※
 大槻 香奈絵 ※
 吉野 章子 ※
 斎藤 翼 ※
 加藤 智浩 ※
 津守 隆宏 ※
 広川 実 ※

●トランペット

○中西 清一 ※
 後藤 慎介 ※
 依田 泰幸 ※
 鎌田 朋幸 ※

●トロンボーン

○渡辺 善行 ※
 平田 芳子 ※
 恵藤 康充 ※

●チューバ

古本 大志 ※

●ティンパニー&打楽器

○石澤 学 ※
 大河原 涉 ※
 小山 有紀 ※
 宮崎 仁 ※

●ハーブ

○平山 菜津子 ※
 梅津 三知代 ※

○印は本日の首席奏者
 ※印は本日の出演者

パーソナルマネージャー
 山川 奈緒子

ステージマネージャー
 土屋 秀仁

ライブリアン
 長田 康宏

〔事務局〕

事務局長 高松 正典 営業・企画 上原 久幸 森田 祐世
 事務局スタッフ 桜井 聖子 福島 貴子 森本 芙紗慧 相吉澤 絵里 石本 順子 山本 ふさこ
 チケット・デスク 武曾 真紀子 木村 有美子
 イメージコーディネーター 古山 忠男 嵯峨 亮子

Program

The 77th Subscription Concert

第77回定期演奏会

指揮:内藤 彰 Conductor: Akira Naito

指揮:曾我 大介 Conductor: Daisuke Soga

コンサートマスター: 執行 恒宏 Concert Master: Tsunehiro Sigyo

●「創立20周年記念作曲公募」大賞作品表彰式

佐藤 絵理 / 「瑠璃船」～オーケストラのために～

(創立20周年記念作曲公募大賞受賞曲) <曾我 大介 指揮>

Eri Sato / "RURIBUNE" For Orchestra

休憩15分—intermission [15']

●指揮者によるプレトーク

ブルックナー / 交響曲第八番 ハ短調

(アダージョ2プラス遺贈稿等による川崎高伸リニューアル・バージョン)

《世界初演》 <内藤 彰 指揮>

Anton Bruckner (1824-1896) / Symphony No.8 in C Minor

第1楽章 Allegro moderato

第2楽章 Scherzo. Allegro moderato

第3楽章 Adagio. Feierlich langsam, doch nicht schleppend

第4楽章 Finale. Feierlich, nicht schnell



文化芸術振興費補助金
(トップレベルの舞台芸術創造事業)

お願い 演奏中は、携帯電話・アラーム付時計等は演奏の妨げにならないようご配慮ください。他のお客様の迷惑になる様なご行為は慎んで頂きますようお願い申し上げます。

ブルックナー作曲

《交響曲第八番ハ短調》リニューアル版

川崎 高伸 Takanobu Kawasaki

交響曲史上屈指の名作であるブルックナーの《第八交響曲》には、楽譜の問題においても彼の交響曲中最大級の複雑さを有することはよく知られています。本日の演奏で使用される楽譜には、これまで数多く論争されてきた諸問題とは異なり、新しい視点、新しい研究成果に基づいた数多くの目新しい内容が盛り込まれています。それらを4つのポイントに分けてご説明しましょう。

1 《アダージョ2》の再演

2004年に、本日と同様、内藤彰指揮東京ニューシティ管弦楽団によって世界初演された《アダージョ2》が再演されます。この《アダージョ2》は、時系列的には確かに第1稿のアダージョ《アダージョ1》と第2稿のアダージョ《アダージョ3》の中間に位置し、自筆資料としても《アダージョ3》と同じもの、すなわちMus.Hs.40.999(註)なのですが、内容としては単なる『中間稿』ではなく、随所に独自の主張が見られます。身近なものに例えてみると、スカイツリーの建設途上のある時点での姿をとらえたものではなく、同じタワーでも別個の東京タワーのようなものと言えるでしょう。東京タワーにはその独自の風貌とそこから来る美と年輪があるように、《アダージョ2》も独自の構造美と独自の展開を示す1つの完成形態なのです。

内容的に、他の2つのアダージョと最も相違の顕著な部分はクライマックスへの登坂のための数ページです。改訂する度に五線紙が新たに差し替えられたため全く別の音楽になっています。中でも、クライマックスへ向かって駆け上がるホルンの咆哮は聴きものです。また、クライマックスそのものも、三現部分を支配する六連符に完全に縛られており、唯一テンポの変化の許されない独特の頑固な容貌を保っていることも注目されます。

《アダージョ2》を自筆資料だけから完全再現することは不可能ですが、幸い筆写譜Mus.Hs.34.614/1が発見され、その全貌が確定しました。そして、この筆写譜の存在こそが、《アダージョ2》が本来の1890年の第2稿のアダージョであったことの証明となっています。《アダージョ3》は、さらにその後の改訂であったというわけです。

なお、《アダージョ2》をインターネットサイトに公開したダーモット・ゴルト博士(Dr Dermot Gault)は英国の音楽学者で、最近「新しいブルックナー」(“The New Bruckner” Ashgate Publishing Ltd.)という本を書かれた新進のブルックナー研究家です。私は、それまで存在が全く知られていなかった《アダージョ2》の筆写譜をたまたまオーストリア国立図書館で発見したという経緯もあって、この校訂作業に共同校訂者として参加しました。

これらのうち④の「改訂版」は1892年、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルにより初演されたときのスコアで、ブルックナー門下のヨーゼフ・シャルクラがオーケストレーションの変更や省略などの改訂を施したものだ。大部分は作曲者による改訂ではないため、今日では一般に演奏譜としては除外されている(クナッパーツブッシュ指揮の演奏はこれによっている)。楽譜の出版としては、この版が最初となるので「初版」とも呼ばれる。

①はこの曲の最初の形態で、指揮者のヘルマン・レーヴィから演奏を拒否されたため、そのままお蔵入りとなった。しかし1972年にレオポルト・ノーヴァクがこの版を出版し、エリアフ・インバルが録音してからは未知の版ではなくなった。インバルのほかにもティントナー、ヴァン・ズヴェーデン、シモーネ・ヤングがこの第1稿で演奏している。

②と③はいずれも、初演以来ずっと一般に使用されていた「改訂版」に対して、「原典版」として編集された楽譜だが、ローベルト・ハースが校訂した②の旧全集版とレオポルト・ノーヴァクが校訂した③の新全集版は、第8番では細部にかなりの相違がある。今日では③のノーヴァク版が優勢だが、朝比奈隆、カラヤン、ヴァントなど、影響力のある指揮者たちがハース版を使用していたこともあって、②も今なお根強い支持者がある。本日の演奏は、第3楽章アダージョが①と③の間に書かれた別稿によるほか、残りの三つの楽章も新校訂版で行なわれるので、詳細は校訂者の川崎高伸氏の解説をお読みいただきたい。

第1楽章：アレグロ・モデラート

三つの主題をもつソナタ形式。再現部のあと、「死の告知」が威嚇的に響く。第1稿ではフォルテで終結していたが、第2稿では静かな「あきらめ」で終わるのがユニーク。

第2楽章：スケルツォ アレグロ・モデラート

ブルックナーの交響曲で初めてスケルツォが第2楽章に置かれた。主部の主題をブルックナーは「ドイツ人ミヒェル」(一般に愚直なドイツ人を揶揄するあだ名)と呼んだ。

第3楽章：アダージョ 荘重に、ゆっくりと、しかし遅すぎずに

ブルックナーのアダージョ楽章のうち最も長大なもの。第7番では使用について迷っていたふしのあるクライマックスでのシンバルを、ここでは第1稿から採用している。

第4楽章：フィナーレ 荘重に、速くなく

作曲者によれば冒頭は「コサック兵の騎行」、続くファンファーレは「オーストリア皇帝とロシア皇帝の会見」というから面白い。コーダは全楽章の主題が回帰して壮大に結ばれる。

※以上の標題的解説は、ブルックナーが1891年に指揮者のヴァインガルトナー宛の手紙に書いた、演奏のためのヒントである。

2

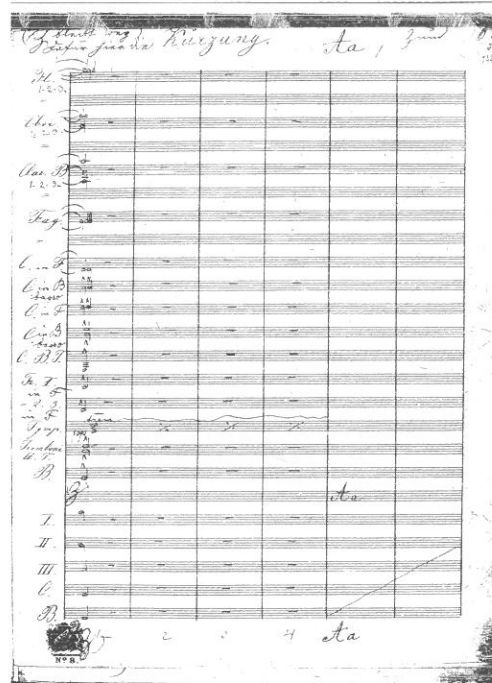
現在普通に行なわれている第2稿による演奏には、ハース版またはノーヴァク版VIII/2(あるいは両者の混交)が使用されています。両者の違いについては、ハースによってなされた第1稿その他からの引用をノーヴァクが自筆稿に基づいて排除したということに起因するのですが、実はハース版を原版として用いたためノーヴァクの修正は不徹底であって、今回自筆譜(Mus.Hs.19.480およびMus.Hs.40.999)を調査したところ、演奏に影響を及ぼすであろうものだけでも、修正漏れは50個所以上存在することが判明しました。それらはアダージョを除いて本日の演奏に取り入れられています。全集版が近い将来更に精度の高いものに改訂されるであろうことは十分予測されますが、本日の演奏はそれを先取りするものであると言えるでしょう。世界で唯一のブルックナー専門誌“The Bruckner Journal”の2011年3月号で、自筆稿通りに訂正された一例として、フィナーレのコーダには1個所を除いて金管楽器には全くスラーが存在しないこと等を含めこのリニューアル・ヴァージョンが紹介され、2011年7月号で、本日の演奏が予告されています。

3

ブルックナーの自筆譜には、フィナーレに奇妙なカットの指示が2か所<展開部の42小節(345~386)と再現部第3主題全部の66小節(581~646)>存在し、さらに前者のカットの前後を橋渡しするための4小節の経過句が新たに1ページ作られて自筆譜に挿入されています(【譜例】参照)。これらは、1891年1月27日付でブルックナーが当時この曲の初演を準備中であったフェリックス・ヴァインガルトナーに宛てた手紙の中で『フィナーレは、指示してあるように断固カットしてください。そうしないと冗長に過ぎます。』と指示した部分であろうと最近の研究では推定されています。本日の演奏では、第1楽章主要動機の回帰を含みさらに属音の保続低音によってコーダと直結する後者の第3主題のカットは作品の終結感を著しく損なうため、前者のカットのみが経過句込みで世界初演されます。というのは、ヴァインガルトナーの演奏自体が実現せず、また、初版を含めてその後の全ての版はこれらの自筆稿上のカット指示の存在を全く無視しており、これまで考慮されることは全くなかったため、今回初めて音として聴くことが出来るようになりました。ただ、かつてクレンペラーは、提示部末から展開部中央までに及ぶ156小節(231~386)と64小節(583~646)の2か所、合計220小節、全体の約13分の1にわたる削除を行なってファンの大衆を買ったことがあります。場所的には自筆稿上のカットをかすかに意識していたことを匂わせますが、これは資料的な裏付けのない勝手な拡大解釈をした暴挙であったと言えるでしょう。

4

1892年春に皇帝から費用を援助されて出版された初版には、膨大な量の演奏上の注釈、すなわち強弱、テンポ、フレーズ等の変更がなされたうえ、音符そのものの改変も若干存在します。今回、初版の印刷用原稿と言われている筆写資料(A178aX11132394)をウィーンの楽友協会から入手し、比較対照した結果、この筆写譜自体はかなりの忠実度で自筆譜最終形態を再現していることが分かりました。そしてそこには膨大な量の変更点(鉛筆などにより書き加えられています。ところがそれらとは別に、たとえば最後の大団円でアダージョ主題を担当するホルンが、自筆譜の2本から初版では4本に増強されているのは、検討に供される前に写譜師がすでに修正譜片を筆写譜に糊づけしていることから自筆譜修正漏れのブルックナー自身の改訂であった可能性も指摘されます。残念ながらこの筆写譜には重要な部分でかなりの欠落ページがあるため、筆写時点をブルックナーの最終意図と見て版を作るためには今後の研究・資料発掘が待たれるところです。なお、この筆写譜にはカットのための自筆挿入譜【譜例】も筆写されており、そこには「印刷しない!」(nicht zu drucken!)と注記されていて、初版でカットが実施されなかった経緯が生々しく窺えるのも興味深いところです。そういったことも含めて、この演奏ではブルックナーの表現様式の変更とは関わらない個所について、いくつか初版を引用しています。特にフィナーレ再現部の打楽器やトランペットについては興味深くお聴きいただけるでしょう。



本日の演奏にあたって、各資料の調査研究のためにコピーをご提供いただいた、アンドレア・ハラント博士(Dr. Andrea Harrandt)とオーストリア国立図書館音楽部門(Musiksammlung der Österreichischen Nationalbibliothek)およびオットー・ビーバ博士(Dr. Otto Biba)とウィーン楽友協会(Gesellschaft der Musikfreunde in Wien)に対して深く感謝申し上げます。

(註) Mus.Hs.が頭についた数字は資料請求番号であって、すべてオーストリア国立図書館音楽部門所蔵の手書き資料です。